

私とバスケットボール（水すましのたわごと）

松本 正 先生

私がバスケットボールにかかわったのは、たしか昭和 24 年か 25 年頃であったと思う。岩本佳市（美祢市）君や開地君達と師範学校の体育館で遊んだこと。それから大学生になり嶋田浩三君と出会ったこと、これが大きく作用したと思う。

附属中のバスケットボールコートで暇があればバスケットをして遊んだこと、シュート競争をしたこと。私は部活は水泳を選んでいたので、兄に頼まれ郷里の中学校に指導に行っていた。

東部地区では当時敵がなく常に総合優勝をしていた。その卒業生が柳商や熊毛南に進学していたので田布施川や余田の池後地（柳商）で指導した。その時出会ったのが谷先生であり、後に熊毛南高校の夏季水泳実習（麻里布海岸）に 2 年連続で行くことになった。

当時バスケットボールは石橋先生と谷先生が指導しておられて、師範の卒業生の山本先輩がコーチであったと思う。その時から大先輩の田中勤先生との出会いがあった。その関係からバスケットのコーチを頼まれ、何が何だか分からないまま引き受けてしまった。25 年は下関南が全国大会に出場し、26 年に熊毛南が出場。友人と名古屋まで全国大会見学に行った。2 回戦負けであった。27 年はどこが出場したか分からないが、28 年は山口高が出場。これも 2 回戦負け。指導者は青木進氏であったと思う。その山口高を負かすためと選手の補強のため、近郷の中学校を軒並みに指導して歩いたが、校長と谷先生の了解で 28 年は 1 年間教育実習をした。大津高は水嶋哲夫先生、特に男子大津高は特筆ものであった。下関東は男子渡辺一平先生、女子は白松寿人先生と立派な方ばかりであった。

中学校では大和中（志熊先生）、田布施中、麻里布中、平生中、城南中、神代中（岸本先生、この中に日立の畑川さんがいた）が県体優勝させる指導者であった。

この秋の県体で、山口高の体育館で山口高等学校を負かすことができ西日本大会（博多）に出場、そのあと県新人大会が大津であり選手 5 人で参加、準決勝長府にフリースローで勝った。決勝は大津高で、後半はオミットになり 4 人で戦って優勝した。その選手の中のガードが、光高の佐浦先生（吉兼君）である。この時期に先輩である二井琢夫氏と周東町の川越中学校に 2 年連続指導に行き、合宿をして、中学男子バレー県体優勝（この中に山本助一氏がいた）、バスケット女子 3 位の成績を取めた。

27 年に中退して就職を言われたが中村彰佐先生を紹介、結局岩国高に就いた。28 年には坪郷先生が就職、後に田部高の女子を優勝させた指導者である。29 年に大学卒業と同時に熊毛南高に就職する予定であったが、年令が若すぎるということであったため、急きょ県教委にて面接、久賀高に就職が決まった。熊毛南高には新進気鋭の和佐本先生が八幡中央高校から着任された。そして佐浦先生たちは公式戦 35 連勝であったと思う。（次々に中学から選手が入ったから）

久賀高には男子部はあったが女子部はなかった。水泳がなかったのでバスケットボールを専門にすることにした。この男子の部員に浜村悦巳先生（西京高校長）、河野啓示先生（柳井高）がいた。河野先生はテニスと掛け持ちであった。また女子の部員の中に山田良樹（日体大教授）先生の妹さんや河野先生の妹がいて、部が賑わった。しかし、ズブの素人のため大変な苦労があった。

3 年後には、熊毛南に岩柳で勝ち、東部県体で決勝で敗れた。全日本予選は大嶺高校であり、決勝で延

長の末敗れた。決勝審判は三戸雅之氏であった。

ここで審判のことについて話すことにする。私は29年から連続5年間全日本高校大会に和佐本先生と自費参加をした。山口県協会には運営資金が不足し動きがとれない状態で、組織が今ほど確立していなかった。山口県の審判長は斉藤太郎氏で、後に水嶋先生が引き継がれた。私はこの5年間で沢山の全国の指導者ならびに審判員を知ることになった。

特に、畑氏、亀里氏にお世話になった。道盛氏（関西）、小野寿吉氏（岡山）、後には小野ドクター（岡山）、川崎氏（長崎）、現役では稲垣氏（日体大学長）、松尾氏（日本網管）等である。38年に山口国体のため36年全日本高校、37年西日本実業団等、協会をあげてご指導を頂いたものである。おかげで、1955（昭和30）年には全公審になれた。頑張ったものである。

当時の審判員の名前を見ると懐かしいものである。水嶋先生と私が赤Aであった。岡山の広田裕史君は中国五大学で戦った仲間であり、当時は広島県、島根県は審判員組織が充実していなかったので手帳にはない。広島県は、後に正守君が行ってから充実した。それと赤Aを付けるのは同じ審判員で差別ではないかというので、40年頃に廃止になった。

山田氏は、嶋田君率いる仙崎中のキャプテンとして県体で優勝、下駄を履いて試合に来ていたものだ。まだ決勝審判をしていた思い出がある。遅攻作戦で審判泣かせのゲームであった。間もなく定年を迎える年令になったと思う。

山口の審判団も、38年の国体を目標に強化強化で関西の方々が特別によく指導された。中央と関西の狭間で一寸主導権をとる形で私たちは困った。しかし、関西の方々はよくしてくれた。綱氏、名越氏、永見氏、栗田氏、吹上大阪、兵庫では秋里、道盛、山戸氏が印象に残っている。山田先生なんか、中央からきて特訓されて、批評に「あなたは何時ラーメン屋になったのか」（コールが、ヘイ、ラーメン一丁に聞こえると言われた）など、人を馬鹿にするにも程があって、中央の奴に私は敢然と立ち向かった。そのため、審判委員会から外される運命になった。

私見であるが、今もあるかも知れないが、中央にへこへこする者が浮かばれるのでは進歩はないと確信している。審判は権威がなくてはならないが、あくまでもボランティア（審判では飯は食えない）であって、謙虚でなければならないと思う。子供達は、指導者を中心に一年計画で一生懸命頑張ってきて、審判のエゴで夢を破られるのではたまったものではない。私を含めて「タコのくそ」にならないよう注意すべきではないでしょうか。

しかし、審判としての夢は大きくふくらみ、岡山の広田君と国際審判でいこうと話合ったこともあるが、山口は今のように交通の便がよくなく、広田君は夢が叶ったが私は口ばかりでダメな男であった。

このあたりから中国五県の連携もでき、蔵田、早川、田中さん（鳥取）、福田、鏑木、須藤、田中さん（島根）、広田、逸見さん（岡山）、中沢、正守、台井、松尾さん（広島）等々がさっそうと登場してきた。

久賀高のチームもようやく一人立ちできるようになった時、佐浦益子先生が卒業して就職してきた。そのあと中村豊継先生も就職してきた。優秀な指導者を迎えたわけである。

大島郡で岩柳の理事長になり（高松校長）、岩柳大会を引き受けたこともあったが、周東大会や下松市長杯が素晴らしかった地域でこんな大会が運営されていたわけである。周東大会は、徳山地区から東の高校が参加して全種目競技をするわけであるが、参加チームが多くなって、結局取りやめとなった。当時

の体育主任がどの学校も素晴らしかったし、大会運営に指導と協力があった。要するに腹の太さが違った。

岩柳では、清水（岩国）、弘中、青木（山本）操（岩国工）、斉藤、弘中、奥原（柳井）、家室（水田校長の父）（田布施農）、谷、和佐本、田中（熊毛南）、吉岡、平井（柳井商）、村上（後下松）（安下庄）、河野（商船）、岩政先生等々であったと思う。

下松市長杯の中心的な方は布施喬先生であった。親身になってお世話をされ、よくご指導を頂いた。事務局を弘実氏がやっていた。後の徳山高事務長である。柳井では、林節郎氏（校長）がよく世話をしたし、柳井中学校では桑原法道氏、大畠中岸本氏等で教職員大会で地区大会を頑張ったものであるが、初めて光高校の先生〔山本、門場（校長）、猪俣（校長）、武居（課長、校長）〕と中国大会（鳥取）に出場、促成のチームで（補欠なし）決勝戦まで進み、惜しくも酒の飲みすぎで負けてしまった懐かしい思い出もあるし、このあと吉規君が山口県に帰ってくれて、選手が増えて喜んだのである。

中村豊継氏が久賀高に来てくれた後に、白松先生が徳山商工を優勝（中村幸男氏（元県協会理事長）らが出た）させられ、その後、県保健体育課に入られた（昭和35年）。その後に私が徳山商工に行くことになった。

岐陽中に志熊一郎氏（後の田布施町教育長）がおられたおかげで、優秀な選手を沢山いただいた。

おかげで35年から40年まで布施先生（後の防府高校、バスケットボール部理事長）引率の下松工業を負かすことができて、それから後、周東大会5連覇をなしとげることができた（38年は国体のため中止）。

また、その当時県定時制大会の徳山商工が3連覇した。当時の選手に藤井義夫、藤田和がいて、岩国商業の甲斐君とよく戦ったものである。当時の名選手、甲斐君は現、高水高校の田丸先生である。当時、日体大を卒業して3人の先生が就職、田丸、水田（桜ヶ丘校長）藤井隆男（三田尻）これが全部バスケット部の顧問となり、このトリオは有名であった。

徳山商工時代に志熊氏と計って徳山市バスケットボール協会を平岡スポーツ店の協力により設立することができた（昭和40年）。

当時県下の実業団チームは、帝人、山パル◎、武田薬品◎、新日鉄◎、鋼管◎、東洋鋼板（下松工）、出光◎（大学）、徳曹◎、東曹、協和醗酵（防商）、宇部ラクタム（クラブ）、長府（クラブ）等であったが、◎印は徳山商工の卒業生が全てキャプテンを務めていた。

高体連は、経費が不足で実連を頼らざるを得なかった。ここで中村幸男氏の登場となる。実連をよくまとめて協力をいただいた。

当時から山口県協会の設立には中村勘一氏（元、山大教授）、福井修治氏（元、山大教授）を中心に設立されたと聞いている。

初代理事長には福井修治、二代 白松寿人、三代 三戸雅之、四代 中村豊継、五代 吉村旦、六代 中村幸男 ではないかと思えます。中村豊氏の時代になり、協会（赤字の中）を再建し吉村氏に引き継いだと思う。さらに中村幸氏になりがちりしたと思う。

歴代会長は、初代 白銀礼治氏（22～23年）、二代 野村幸祐氏（24～38年）、三代 二木謙吾氏（39～54年）、四代 佐藤信二氏（55～現在）

高体連は、水嶋氏、布施氏、和佐本氏、柏村氏、吉規氏、佐藤氏等であったと思います。

審判の方は、斉藤太郎、水嶋哲夫、山本正之、山田隆道～現になった。

41年に柳井に帰ってきて、早速柳井バスケットボール協会の設立を目指し、これもうまく設立することができた。これも平岡運動具店、特に高岡氏や田中忠男氏の協力によるものであった。

柳井市バスケットボール協会設立後、県内にも岩国をはじめ各地に協会が設立され、バスケットボールは益々充実隆盛を極めることとなった。その後、各地協会主催で招待試合が行われるようになり、県協会主催の大会も地域のバスケット人口の増加と技術の向上、審判員の養成を目的として各地区分担で行うこととした。3月の山口会長杯（柳井）も、平成10年で32回を数えるようになった。ほそぼそとした大会も運営が大変であったが、現在は参加チームを制限しないと大会運営ができない状況である。

後に三戸杯、関門大会、岩国会長杯、朝日杯、TYS杯、徳山サマーカップ等々関係者の努力により素晴らしい大会が続出している。実業団、一般、高校、中学と登録チームがあったが、現在は車椅子大会（柳井市で初めて教員団と試合をしたのが皮切り）、柳井市協会長（故）難波勝美氏や西村氏（防府養護学校）や三枝啓巳氏（教育調整監）らの努力による所が多いし、吉村氏や山田隆道氏（審判）の後援も大きかった。

また、ミニバスケットボールの部も大きい発展を見せている。県協会の組織も改善発展、向上し、代々の理事長の手腕に負う所が大である。

高体連の方も指導者が年々充実し、中国地区ではなかなか負けない所まできているが全国大会に行くところ今一步の所がある。渡辺先生の指摘のとおりである。中学校はとてもよい成績であるが高校で育っていない。昔、大津高校が6年制で全国3位までなった（水嶋氏の指導）が少子化が進み学制改革が問われている今日、クラブの活性化は6年制、単位制で進むと面白いかもしれない。

私見であるが、戦後、獲得した自由主義でなく押し付けの自由主義の教育方法をアメリカ的に日本が受け入れたことに溯ることになるかもしれないし、欧米流の、学校が責任を負うのではなく、学校は学校、部活動は家に帰ってから自己の責任でよい指導者の所に行くいわゆる社会体育、現在その狭間で未消化のまま口先で生きているように感じられる。それだけバスケットボールはむずかしいと思っている。攻めることを主体にする指導者、守ることを主体にする指導者、意見がそれぞれ分かれる所であろう。私達は昔アメリカの指導者に付いた時、攻めることを主体に指導されたが、あと反省会の時マスコミがシュートのよい者ばかり取り上げ、一生懸命守った者を取り上げてくれないと不満を述べていたことを思い出す。リングの大きさ、高さ、フリースローの距離は他のルールは変わっても全然変化のないバスケットボール。みなさんはどのようにお考えであろうか。

ゆくゆくは世界の競技は全部中国に金メダルをさらわれるのではないかとされている強靱な足腰のバネに加え国を中心とした精神力、食生活は、現在日本的・利己的・無関心・自己主張ばかりで無責任な行動の多い島国根性では太刀打ちできないのではないかと危惧するものである。

精神力の問題で昔のことを思い出したので一寸述べてみよう。以前にも記述したが山口県教員団である最初は、門馬氏、猪股氏、山本氏、田中氏、松本であったが吉規先生が加わり白松先生の骨折りで安田望氏（小郡町教育長）がサッカーから入ってきて、安田氏を中心に教員団の再発足をしようとした。県下に呼びかけて出来そうな人に集まっていたいただいたわけだが（順不同、敬称略、落ちがあったら連絡くださ

い、佐藤太助（高森高教頭）、藤井耿介（光ふるさと郷土館）、佐浦綾男（元教頭）、吉規喜代二（岩国短大）、吉村旦（学習研究社）、中村豊継（松屋苑）、山本恒夫（小郡）、藤山武（元校長）、岩崎克之助（中学校長）、○寺内保博（中学校長）、○濱村悦己（西京高校長）、岩本徳郎（宇部高専）、藤井頁治（退職）、渡辺一平（福岡教育大）、羽生恵三（下関女短）、佐藤理（下関工）、藤村健治（長門高）、山田隆道（萩養護）、山田紘（佐々並中学校長）、○桑原英雄（宇部高）、田丸（旧姓 甲斐）暁（高水高）、○枝折幸正（岩国工業高、高体連委員長）、等々であった。多少前後のずれは記憶が定かではないのでお許しを。○印は後から入ってきたような気がする。防府が中心で合宿の上又合宿、予算がないので持ち寄り、県大会等を利用して出張を兼ねた事もあった防商や防高を相手に練習。にわか仕立てなので、とにかく苦勞したものである。時には光の海岸でヨットの合宿所に入ったこともある。その時は藤井先生や吉規先生の奥様がムスビを作って、差し入れとか大変おいしくいただいた記憶が残っている。

現在のように、交流村とか青年の家とかがあれば楽なものである。無から有を生み出す辛さは大変なものであった。しかし、誰一人文句を言う者はなかった。人間は物が無い方が正直でよいと思う。することがない時は技術や審判のことで花が咲いたが、元気で若い者の集まり、いきおいマージャンや花札の特訓となる。おかげで勝負師根性がここで培われたような気がする。酒も酔わないように上手に沢山飲む方法等々、秋田国体に参加した時はお寺さんが宿で、試合が終わった晩の打ち上げは、酒が2斗以上（一升ビン20本とビール）いったとか坊さんが話しておられた。ドンドンパンパンの歌（国体開会式入場行進の曲）で飲むのだからそれはすさまじかった。

また、日紡平野（現ユニチカ）の監督尾崎氏の骨折りで、大阪に1週間合宿をしたことがある。わずかな強化費を大事に持っていったから旅館に泊まるようなことはない。女子の寄宿舎に泊り日紡の選手（女子）と全く行動が一緒であった。最初の1～2日はよかったが、女子とは言え日本一である。練習は楽しくなければならない！！がとんでもないこと、殆どの選手がへどを吐き、惨たんたる有様であった。

甲南大の選手とも一緒であったが話しにならない、とにかく井の中の蛙大海を知らずであった。ほんとうによい経験をしたものだと思う。私はお陰で女性専科になった。今のように新幹線がない時、お金はないし、全て夜行列車の利用である。乗るとスグ花札の特訓、安田氏、藤村氏が強かった。負けてくじけず、勝っておごらずの精神、負けてなるものかの闘魂がこれで出来あがったのではないか。マージャンは吉村氏や中村豊氏が強かった。その後、血を引いたのが山田氏や濱村氏、桑原氏であると思う。私や佐浦先生は、もっぱら宴会係であった。それぞれ根は優しくて力持ちばかりの教員団員であった。以後、素質のある選手が育ち集まり今日の教員団が出来たと思うが、生徒が減少するのが気がかりである。

国体が終わり、柏村時代に中国五県の役員が親睦と研修を兼ね1泊2日で五県持ち廻りの総当たりで試合をやっていた。どの県も理事以上参加、酒豪が揃っていた。ところが各県引き受けの度に引き受け県に負傷者が出る。酒代が高くつく。勝つのは山口だけ。山口県が引き受けた時はけがをしないよう細心の注意を払い、他県に今までのお返しとばかりに飲ましたのであったが、広島県呉在住のドクターがそれも外科医がアキレス腱を切り、来年度から中止しようということになり、他県が全部賛成、山口だけ続けようとしたがだめであった。

その後、総体事務局に仕事に移り、仕事が多忙になり訳あってバスケットボール協会から足を洗わされていたが、教員退職と同時に又柳井協会の方に関わりを持つようになり、少しでも市協会や県協会のお力になればと、田舎の方でぶつぶつとたわごとを言っている今日である。皆さん元気はして頑張りましょう。未来に向けて！！

たわごとの終わりにあたり、益々のバスケットボールの発展と関係する皆さんのご健勝を祈念して、悪文悪筆、失礼の所お許しを願って終わります。

-----

高体連機関誌「南風」19号（H9年11月）～21号(H10年11月)に掲載